

平成25年度 福山大学助成金活用教育研究

# 実 践 報 告 集

## 【第2集】

平成26年5月

福 山 大 学

## 巻 頭 言

福 山 大 学  
学 長 松 田 文 子

「教師が教えた質と量は学生が体得した質と量によって測られる」という言葉がリアルな重みをもって大学現場に浸透しています。ステークホルダーからの本学への期待を裏切ることなく、学生の真実に立脚し、知識、技能、態度を専門領域について身につけさせるだけでなく、社会人基礎力のような汎用性のある力を引出し身につけさせ、本学のミッションである「地域の中核となる幅広い職業人の育成」に繋いでいきたいと思えます。

本学では平成21年から開始した「福山大学新教育システム」の充実に向け様々な取組を行ってきましたが、その一環として平成24年度からは、教育研究活動の深化及び学生の主体的な学修、またそれらを地域連携の中で展開することを期し、「福山大学助成金」を活用した教育研究を開始しました。本助成金は学長の直轄予算として新設されたものであり、平成25年度も、「特色ある教育方法の開発に対する取組」と「学生の参加する社会連携活動に対する取組」の2分野について15のテーマに沿った個人及びグループによる研究が進められました。

この度、その取組の実践報告集「第2集」が、平成24年度の「第1集」に引き続き刊行される運びとなりました。1年間にわたって地道で精力的な取組をしていただいた先生方のご努力に対し、心より感謝申し上げます。

言うまでもなく大学における教育活動は、学生の学修活動を一定の目標に向かって誘導し、あらゆる可能性に働きかける目的意識的な行為ですから、目標から結果への道筋の中で、その行為の有効性を確かめ、その汎用性を確認していかなければなりません。学生に資する独創性をもつ実践は、同時に標準性、互換性も求められ、その実践が一定のエビデンスに依拠しつつ集团的営為に還元できるかどうか問われているのです。学ぶ主体は学生であり、個々の学生は明確な「目的意識をもつ教師集団」によって育つという学校教育の基本原則に立ち返れば当然のことでしょう。今次の実践報告集を、そのような一連の螺旋的、集团的営みに寄与するものとして、有効に活用していただきたいと思えます。

紙幅の関係で、今次の研究者に提出していただいた全ての資料をこの報告集に掲載することが出来ませんでした。この報告集の中に、例えば「別紙資料参照」とか、「別紙の図・表を参照」などがある場合、それらが掲載されていない場合があります。これらの資料は本学HPの「教育助成金報告書」に掲載していますのでご参照いただくか、直接研究者にお問い合わせくださるようお願いいたします。この報告集があらゆる場面で有効に活用されることを願っています。

## 目 次

種別	N O	研究代表者			研究テーマ	ページ
		学部	学科	氏名		
特色ある教育方法開発	①	人間文化	心理	橋本優花里	「ピア・サポート・トレーナー養成講座」プログラムの伸展とアウトカム評価の研究	1
	②	人間文化	人間文化	青木美保	フィールドワークによる地域文化掘り起こしと地域活性化への提言—井伏鱒二の文学に描かれた地域文化を通して	2
	③	人間文化	メディア情報文化	内垣戸貴之	学生活活性化を目指した複数科目のクロスカリキュラム的授業デザインの試行	3
	④	大学教育センター		荒木紀幸	ワークショップスペース（CLAF T, 学習支援室など）を活かした新入生のための楽しく学ぶ「チーム学習」カリキュラムの開発	4
	⑤	工	情報工	宮崎光二	iPad を用いた出席管理システム	6
	⑥	生命工	海洋生物科	河原栄二郎	アウトリーチプログラムを導入した新たな学芸員養成教育の取組み	7
	⑦	薬	薬	石津 隆	薬学部学習支援におけるチューターおいびメンター制度の導入	8
	⑧	薬	薬	吉富 博則	学部連携型 PBL システムの構築（具体的授業プランの検証）	17
	⑨	生命工	海洋生物科	河原栄二郎 （後期開始）	教育実習生の学習指導技量評価法の開発と応用	19
学生の参加する社会連携活動	⑩	経済	経済	相原正道	スポーツ体育会スタートアップ・ミーティング	20
	⑪	経済	経済	相原正道	産学連携による研究調査事業委託および大学ゼミ対抗スポーツ政策コンテスト参加	22
	⑫	人間文化	人間文化	青木美保	ロボコミュニケーション社会・創造プロジェクトⅡ	27
	⑬	人間文化	メディア情報文化	阿部 純	「映画論」を福山駅前で一福山近郊映画館と協働した上映会の企画運営	28
	⑭	生命工	生物工	山本 覚	地域住民と連携した学生による本郷川の環境調査と修復活動	30
	⑮	生命工	生命栄養科	平松智子	学生の社会連携活動参加を促進するポイント制	32

<①>

「ピア・サポート・トレーナー養成講座」プログラムの伸展と  
アウトカム評価の研究

所 属 人間文化学部心理学科

職 名 教授 氏 名 橋本優花里

(成果の概要)

本課題は、平成 24 年度から始まった心理学科のピア・サポート・トレーナー養成講座プログラムの拡充を目指した取り組みであった。本課題の目的は、①ピア・サポート・トレーナー 養成講座の充実と養成講座参加 2 年目となるシニア・トレーナーの育成、②ピア・サポート・ルームの開設、③アウトカム評価の検討の 3 つであった。①については、今年度、11 名のシニアと 9 名のジュニア（今年度初参加）のメンバーを得て、シニアとジュニア協力して活動を進めていく形ができつつあり、先輩から後輩へのピア・サポートの精神とノウハウが伝えられる仕組みが整ったといえる。このことは、②のピア・サポート・ルームの開設にも大きく貢献した。今年度は、同じ学科の学年を越えた仲間同士でのピア・サポート活動を日常的に継続して行いたいという希望がメンバーのなかから出てきた。そこで、トレーナーの一部の学生が中心となって、学年を超えて学科内のメンバーが自由に参加できる昼食会「こころめし」や、自由に立ち寄り、サポーターの支援を受けることができるピア・サポート・ルームの開設に向けた試みが始められた。このような具体的な取り組みの提案には、シニアの前年度の経験による問題意識や課題がジュニアに伝達・共有されたことが大きく影響していたと考えられる。③については、事前調査の準備が整わず、実施には至らなかった。しかしながら、国内外の研究や取り組みを参考にした調査から、トレーナーとしてのスキルや資質の向上を評価するには、「社会人基礎力」に焦点を当てることが望ましいことが明らかとなり、現在、その内容を取り入れた質問紙およびブルーブリックを開発中である。なお、本年度の活動の成果は、下記に掲載された。

橋本優花里・川人潤子・山崎理央・青野篤子 (2014). ピア・サポート・トレーナー養成講座の発展——2 年目の取り組みと今後の課題——福山大学人間文化学部紀要, 14, 121-136.

<②>

## フィールドワークによる地域文化掘り起こしと地域活性化への提言

### —井伏鱒二の文学に描かれた地域文化を通して—

所 属 人間文化学部人間文化学科

職 名 教授 氏名 青木美保

#### (成果の概要)

##### 1、研究の概要

井伏鱒二の文学において「在所もの」といわれる福山市、備後を舞台とする作品を取り上げ、「水」と「金属文化」のイメージをたどって、福山・備後の文化の特徴を明らかにする。その原点である「備後穴の海文化」の特徴と井伏文学との関連を明らかにする。

##### 2、フィールドワーク

###### ①備後と出雲の金属文化を訪ねて

6月1日～2日 「たたらと刀剣館」、「古代出雲歴史博物館」等見学

###### ②大三島肥海村海蔵山金剛寺の梵鐘の鑄造について

2月25日 金剛寺で聞き取り調査、大山祇神社見学。

##### 3、成果発表

###### ①夏のオープンキャンパスで発表

「井伏鱒二文学の背景—備後と出雲の金属文化とスサノオ神話」

9月7日 見学会で学生が高校生にパワーポイントを用いて成果を説明。

★この調査には中国新聞エリア通信員が同行、内容は中国新聞HPにアップされている。

###### ②文化フォーラム 番外編 として、ふくやま文学館で発表

「備後穴の海文化—井伏鱒二の文学に引用された濱本鶴賓の文章」

3月18日 学生と青木がパワーポイントを用いて、地域の人々に説明。

地域の文学・歴史愛好者が40名弱集まり、熱心に受講された。後日、受講者からの情報提供もあった。

<③>

### 学生活活性化を目指した複数科目のクロスカリキュラム的授業デザインの試行

所 属 人間文化学部メディア情報文化学科

職 名 准教授 氏 名 内垣戸 貴之

#### (成果の概要)

対象とした授業は情報科教育法Ⅱ（3年次開講）と基礎演習（1年次開講）の一部の回を連動させ、情報科教育法で行う模擬授業への出席を基礎演習の課題とし、模擬授業の生徒役として授業に参加してもらった。

その中で ICT は次の 2 つの場面で取り入れた。

第 1 に、情報科教育法Ⅱの課題である指導案作成に関わって、hototogiss システム(指定されたアドレスにメールを送信すると、メッセージがウェブ上にオブジェクトとして表示される仕組み)を使い、情報収集とそれに基づくディスカッションを行った。

第 2 は、情報科教育法Ⅱで指導案を構想する際に ipad とロイロノート（写真やテキスト情報を 1 つのムービーとして保存することができ、ストーリー性のあるコンテンツを作成することができる。また無線 LAN を通じてコンテンツを共有することもできる）を使い、学習者が個別に考えた指導案（授業の流れを表したもの）を共有し、ディスカッションと指導案の修正を行った。

今回の試行は、個別に収集された情報を一元化かつ視覚化して提示する仕組みと、ストーリー性のあるコンテンツに対し、他者が他のコンテンツをシームレスに提供するという形で協働的に参加する仕組みを授業に組み込んだものである。今回は情報の共有に主眼をおき、その成果を複数授業でクロスさせることで異学年交流が促進できた。今後は、これらのツール・環境を思考の視覚化やディスカッションの促進といった展開を検討中である。

<④>

ワークショップスペース(CLAFT;学習支援室など)を活かした楽しく学ぶ  
「チーム学習、特に討論重視の学習」の授業方法の研究

所 属 大学教育センター

職 名 教授 氏 名 荒木紀幸

(成果の概要)

「チーム学習」の提唱者である西之菌晴夫京都教育大学名誉教授の研究を参考に、本学の学生に合った楽しく学ぶ「討論を重視した学習」、授業の開発を目的として研究を行った。そのために理論的背景を望月志帆氏（学習開発研究所員）を招き学ぶことから始めた。

その後、「討論学習」の可能性を検討し、荒木紀幸と山口昌宏が担当している後期の授業「教職実践演習」で、ゲストティーチャーの協力を得ながら、「教員としての資質」「教員の社会性」「学級経営の在り方」等に関わる探求の領域の中で用いたワークショップで具体的に実践してみた。また鶴崎健一の担当する「衛生学」においても実験的に「チーム学習」について検討している。荒木もまた、自身の授業や外部の教育研修会においても「討論学習」の可能性を検討している。ただ今回試みた研究授業の実践では、実践の前段階として授業のための準備に相当な時間が必要なことが分かった。また、授業では、小集団のチームがいくつも作られる。そのため、1人での授業は無理である。授業はチームを組み、役割分担して進めなければならないこと、そのためには補助教員やファシリテーターが必要なこともわかった。

研究ではたくさんのデータや資料が得られたが、その細かい分析やそれに基づく考察にはかなりの時間が必要である。それは今後の課題となるが、これらの成果の一部を本年度、日本教材学会、日本教育実践学会で発表する予定である。今回は、今後の研究の参考に、また授業での活用にと、一連の研究で試みた「チーム学習」の授業計画や提示資料、回収された各種資料、回答例や授業感想、授業風景写真等で構成した下記のような報告書を作成する。

記

1. 「チーム学習」に関する研修 講師（望月志帆） .....	3 ページ
(参考資料) 多人数でもできるチーム学習 .....	6
2. 「教職実践演習」における「討論学習」 担当（荒木紀幸） .....	10
2-1. オリエンテーション .....	10
2-2. 「チーム討論学習」のための事前準備 .....	11
2-3. 教育実習を振り返って（まとめ）と回収資料 .....	14
3. 「教員としての使命感・責任感・教育的愛情に関する探究」担当（山口昌） ...	17
4. 「教員としての社会性・対人関係能力に関する探究」担当（岡田達也） .....	28
5. 「教師ストレスと精神的健康について」担当（荒木紀幸） .....	32
6. 「生徒への理解力と学級経営に関する探究」担当（京江光之） .....	43
7. 「発達心理学」における「討論学習」担当（荒木紀 .....	45
ジレンマ課題「こうのとりのゆりかご」を用いて	
8. 「教職概論」における「討論学習」担当（荒木紀幸） .....	50
8-1. エリオット先生による差別、偏見克服への授業「青い目茶色い目」を視聴して	
① 小学3年生「青い目茶色い目」前半20分（子どもが目の色で差別される授業）	
を視聴し .....	50
② エリオット先生の差別体験授業「青い目茶色い目、大学生対象」を視聴して	55
8-2. 山田洋次監督の映画「学校」を視聴し .....	57
9. 「生涯発達心理学」における「討論学習」担当（荒木紀幸）	
モラルジレンマ資料「ハインツのジレンマ」を用いて .....	60
10. 「矯正教育」における「チーム討論学習」担当（荒木紀幸）	
モラルジレンマ資料「この子のために」を用いて .....	63
11. 「チーム学習」の実施例とその経験から教養科目での実施を考える	
担当（鶴崎健） .....	69



<⑤>

## iPad を用いた出席管理システム

所 属 工学部情報工学科

職 名 講師 氏 名 宮崎光二

### (成果の概要)

本課題の開発内容は大きく分けて次の3ステップになります。

Step 1. 1台の iPad を使って出席を取る、データ管理

Step 2. 複数台の iPad で通信しながら出席を取る、データ管理

Step 3. 管理サーバーの構築およびゼルコバとの連携

これらのうち、平成 24 年度は Step 1. を完了しています。本年度（平成 25 年度）は Step 2. の開発と実用テストを行いました。

Step 2. の詳細は以下のとおりです。

- ・ 1つの教室の出席を複数の iPad で登録できるように機能拡張
- ・ iPad 間を Bluetooth 通信で結び、出席登録データの同期を可能にした
- ・ 同期するデータは写真と出席の有無など
- ・ 大学院生に開発の一部を手伝ってもらった

### ※実用テストについて

- ・ 前・後期の1年間を通して実際の自分が担当している授業で試用した
- ・ 科目数は半期の授業が8科目
- ・ 出席登録回数（写真枚数）は合計 約 2800 枚
- ・ 上記の試用ではトラブルも不具合もなく利用することができた
  
- ・ 情報工学科の先生方に後期授業で試用してもらった
- ・ 試用のアンケートを行い、「出席にかかる手間を省き授業の質向上に貢献できるのでは」との回答を得られた

<⑥>

### アウトリーチプログラムを導入した新たな学芸員養成教育の取り組み

所 属 生命工学部海洋生物科学科

職 名 教授 氏 名 河原栄二郎

#### (成果の概要)

平成 24 年度の「ふれあい出前水族館を活用した社会人基礎力養成教育」をさらに発展させ、取り組み過程を通して学芸員としての資質を高める方式の PDCA サイクル形式を取り入れたアウトリーチプログラム教育を行うことで、新たな学芸員養成教育を図ることを目的に、神石高原町立三和小学校（9 月 24～27 日）、福山大学三蔵祭（10 月 18～20 日）およびじばさんフェア 2013（10 月 25～27 日）の合計 3 施設で「アウトリーチプログラム」を実施し、学芸員養成課程を履修する 4 年生 13 名を教育した。

学生は出前水族館や出張授業等のアウトリーチプログラムを実施する前に、事前学習としてグループディスカッションを積極的に取り入れながら同プログラム内容を立案し、また、同プログラム実施後に事後学習として問題点を取りまとめて整理して実習報告書を作成することで、改善した同プログラムを構築した。実習報告書で学生は水族館を活用した理科教育の有効性を示唆しており、それを実行するためには、運営スタッフ間での詳細な打ち合わせや、生物を含めた展示資料の事前準備がいかに重要であるかを理解し、展示解説を行う際には、対象者の年齢、性別および興味の内容など様々な状況に合わせて対応できる技能の必要性を学習できたと考えられる。したがって、本実習に参加した学生は博物館実習として受講している学外博物館施設での実習期間中には十分に習得できなかった博物館が持つ社会教育施設としての役割、展示前の調査、展示物に関する研究の重要性およびコミュニケーション能力の必要性を十分に理解したと考えられる。以上の成果は、福山大学内海生物資源研究所報告第 24 号に報告した。

<⑦>

## 薬学部学習支援におけるチューターおよびメンター制度の導入

所 属 薬学部

職 名 教授 氏 名 石津 隆

### (成果の概要)

本課題では、初年次教育をはじめとして薬学教育におけるモチベーションと学習効果の向上を目的としてチューターおよびメンター制度の導入し、以下の成果をあげたことを報告する。

薬学導入教育である「薬学入門Ⅰ」における PBL・SGD 及び学習相談室に、上級生がチューターと参加して1年生をサポートする初年次教育システムの開発を行った。今年度実施したこの「薬学入門Ⅰ」でのチューター制度についてはアンケート調査を行ったところ、SGD における1年生の自己評価においても上級生がチューターとしてサポートしたグループ (P3) がチューターなしのグループ (P1・2) に比べて高く、高い評価である4点、3点と答えた学生が多かった。また、上級生チューターによる指導については1年生に好評であった。(別紙1) このことから、上級生チューターが SGD の進行や討議内容に良い影響を与えていることがわかった。さらに、前期の上級生によるメンター制による学習支援において、上級生がチューターとしてサポートしたグループ (P3) の学生利用者は 29 名であり、チューターなしのグループ (P1・2) の学生利用者 (P1 : 10 名、P2 : 13 名) に比べては約 2 倍の利用がみとめられた。このことから、早期に上級生が1年生とかかわることが、1年生のメンター制の利用促進につながることがわかった。

このようなチューター制度と並行して、上級生が下級生の学習支援をはじめとした学生生活全般についての指導や助言を行うメンター制度を導入した。講義内容で十分に理解できなかった部分など、先生には敷居が高くて質問しにくいことでも上級生のメンターなら気楽に質問でき理解度が向上するのではないかと考えこの制度を導入した次第である。前期はすでに薬学入門Ⅰの SGD において1年生と顔見知りになっているチューターの5年生6名にメンターにもなってもらうことにした。メンター活動の場所としては前期中間試験までは 34 号館 3 階学習支

援室2（34317）を使用していたが、その後は1年生が普段講義を受けている10号館2階1021教室に活動の場を移して行った。基本的に男女1名ずつ計2名のメンターで活動を行った。後期については指名と応募により新たに11名の5年生をメンターとして任命し、活動の場所としては34号館2階研修室2（34216）を用いた。このメンター制度については別紙2に示すポスターを薬学部掲示板に掲示した他、講義担当教員による講義時間の前後でのメンター制度についての紹介や、ゼルコバを用いた広報により周知に努めた。その結果、別紙3に示す数の1～3年生が相談に訪れた。その他、担任からの要請に応じて成績が不振な学生への個別の学習支援も行った。

今回メンターとなった5年生について別紙4のアンケートを行ったところ、10名のメンターからの回答が得られた。「今回のメンター活動により下級生の勉強や学生生活に役に立ったと感じますか。」という問の平均得点は2.8（最高4.0）で役に立っていると感じている学生が多いことがわかった。また、「このようなメンター活動は今後も続けたほうがよいと思いますか。」という問の平均得点は3.0（最高4.0）で続けたほうがよいと考えている学生が多いこともわかった。なお1名だけ「やめるべきだ。」と回答したメンターがいたが、その理由は「メンターにばかり頼るのではなく、先生に質問に行く習慣をつけたほうがよい。」というものであった。その他、「後輩に教えることによって、自分の勉強にもなり知識が深まって良かった。」や「メンターに来る人は、勉強の仕方が分からない人が多かったので、勉強の仕方を教える良い機会になったと思う。」などという肯定的な意見があり一定の成果が確認できた一方で、「メンターの得意科目等も知らせておいた方がよい。」や「下級生のテスト範囲を事前に知っておきたかった。」などのような意見もあり、今後の検討課題である。また、特に後期定期試験が始まってしばらくすると質問に訪れる学生の数が増えたことも今後の改善点としてあげられる。

薬学入門(グループ討論:SGD)アンケート

1. グループについて

最低 (NO)

最高 (YES)

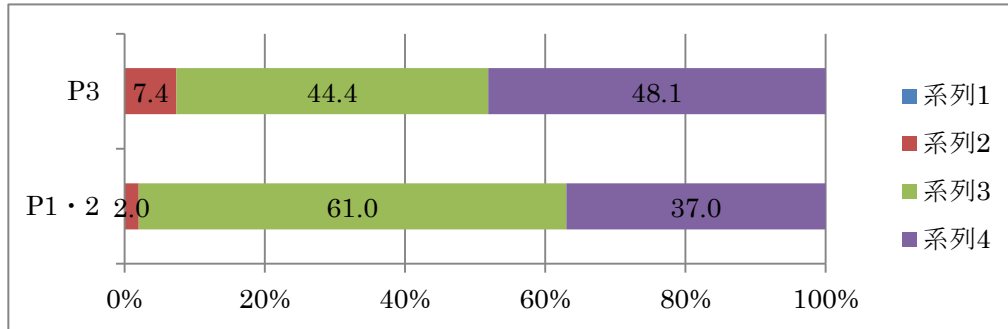
グループはまとまっていたか？

1

2

3

4



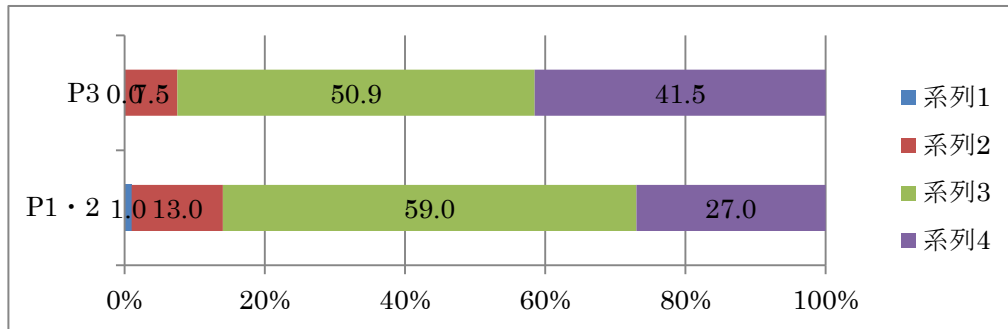
グループ討議は活発でしたか？

1

2

3

4



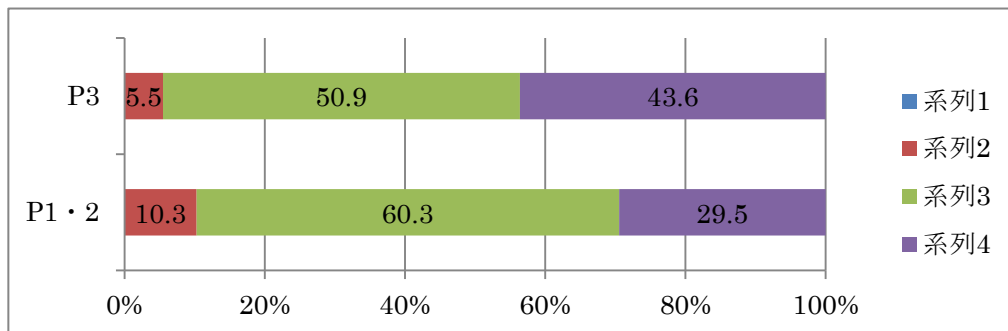
メンバーはSGDに積極的に参加していましたか？

1

2

3

4



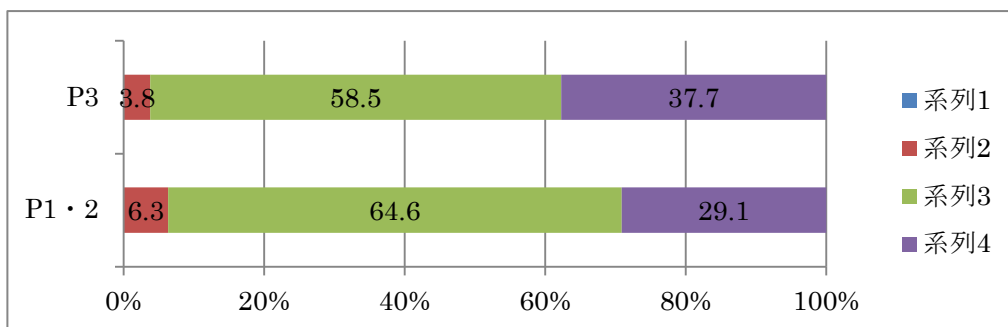
SGDによって良いプロダクトができましたか？

1

2

3

4



## 2. 自分自身について

最低 (NO)

最高 (YES)

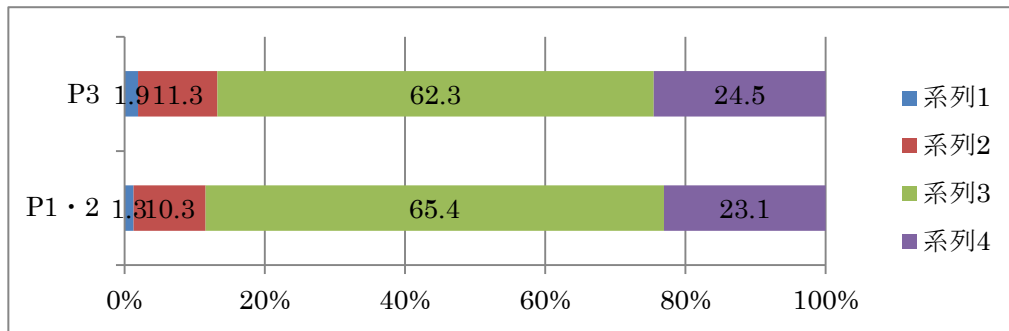
あなたはSGDの作業にスムーズに入りこめましたか？

1

2

3

4



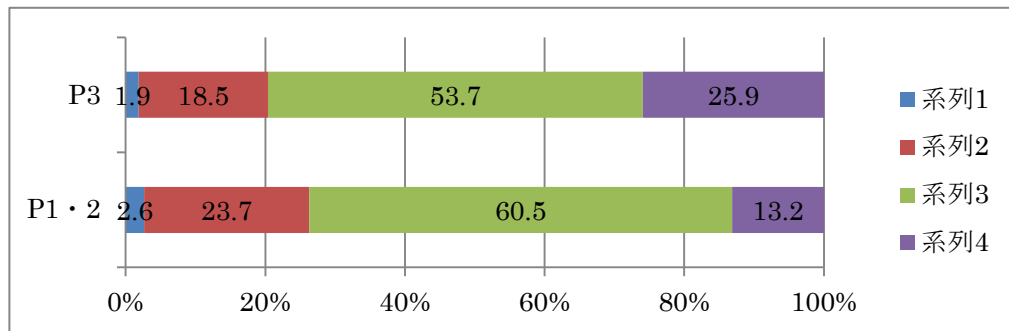
あなたはSGDで積極的に発言しましたか？

1

2

3

4



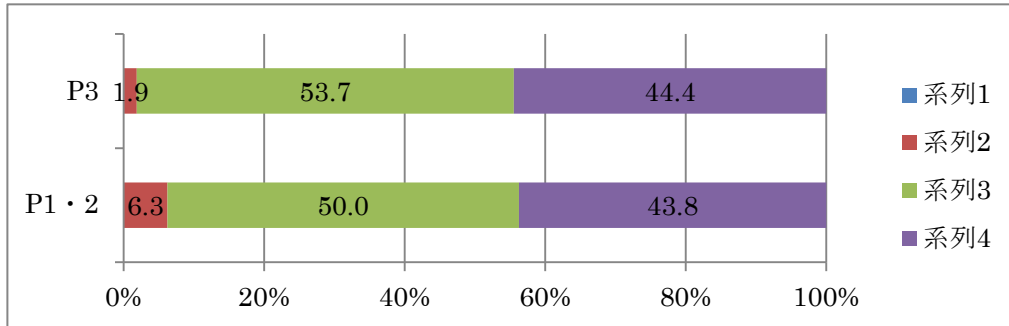
あなたはSGDでメンバーの意見を傾聴することができましたか？

1

2

3

4



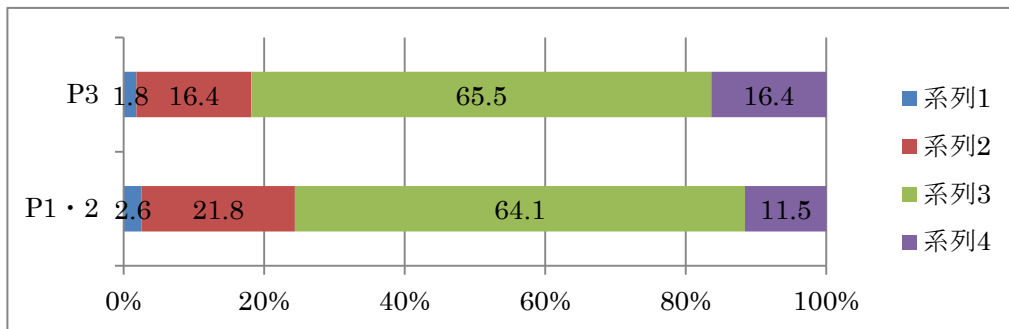
あなたはSGDでメンバーの意見をまとめることができましたか？

1

2

3

4



### 3. チューター制について(P3のみ)

最低 (NO)

最高 (YES)

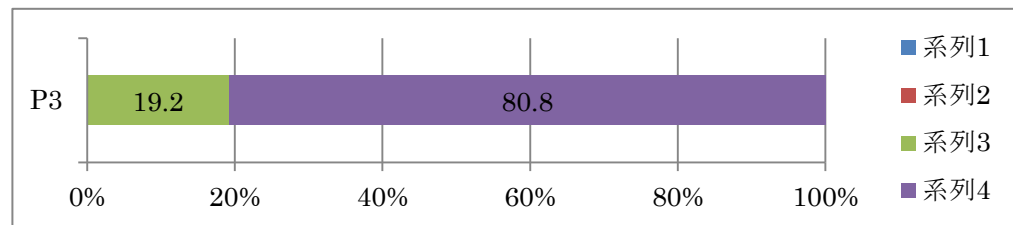
SGDにおけるチューター(5年生)の指導はよかったですか? 1 2 3 4



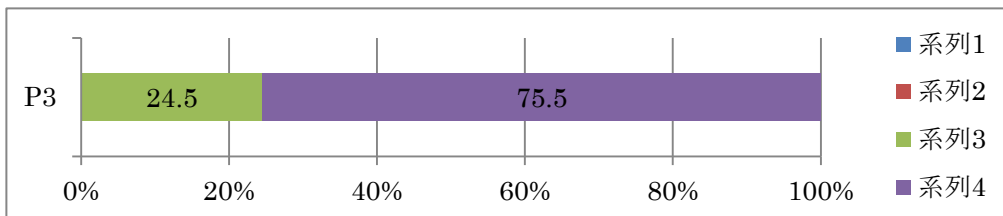
チューターのサポートでSGDの作業にスムーズに入りこめましたか? 1 2 3 4



チューターのサポートでグループ討議が活発になりましたか? 1 2 3 4



チューターのサポートでグループがまとまりましたか? 1 2 3 4



# 学習相談室の案内 No.

心やさしい先輩(5年生)が、相談に乗ってくれ、勉強を教えてください。

2月4日より始まる後期定期試験に向けて、1月21日より学習相談室を開いています。試験期間中も学習相談室を開いています。

どうやって試験勉強をしたらよいのか悩んでいる人、苦手科目に不安のある人は、学習相談室を利用しよう！

先輩(5年生)が相談相手です！是非、気軽に訪ねてください。1月27日～2月1日の間の学習相談室の開設の日時は以下の通りです。

	時 限	担当者(5年生)
1/27(月)	3限 13:00-	メンターA、B
1/28(火)	3限 13:00-	メンターC、D
1/29(水)	3限 13:00-	メンターE、F
1/30(木)	3限 13:00-	メンターA、B
1/31(金)	3限 13:00-	メンターC、D
2/1(土)	3限 13:00-	メンターE、F

場所: 34号館2階研修室2 34217教室

その他の日時に学習相談を受けたい人は石津、井上(裕)に連絡ください。

石津、井上(裕)



## 別紙3

## モンテイ来室者数

## 【前期】

日付(2013年)	1年生	2年生	3年生	合計
5月27日(月)	12	0	0	12
5月28日(火)	10	0	0	10
5月29日(水)	10	0	2	12
5月30日(木)	10	0	0	10
5月31日(金)	10	0	1	11
6月3日(月)	9	0	0	9
6月4日(火)	8	0	0	8
6月5日(水)	4	0	0	4
6月6日(木)	1	0	0	1
6月7日(金)	11	0	0	11
7月16日(火)	9	0	0	9
7月17日(水)	5	1	0	6
7月18日(木)	3	1	0	4
7月19日(金)	1	1	1	3
7月20日(土)	6	0	0	6
7月22日(月)	10	0	1	11
7月23日(火)	8	0	1	9
7月24日(水)	6	20	0	26
7月25日(木)	10	6	1	17
7月26日(金)	8	6	0	14
7月27日(土)	1	2	0	3
7月29日(月)	2	0	0	2
7月30日(火)	0	3	0	3
7月31日(水)	0	6	0	6
8月1日(木)	2	0	0	2
8月2日(金)	1	0	2	3
8月5日(月)	1	0	0	1

## 【後期】

日付(2014年)	1年生	2年生	3年生	合計
1月21日(火)	0	0	0	0
1月22日(水)	3	3	2	8
1月23日(木)	2	4	3	9
1月24日(金)	2	2	4	8
1月25日(土)	1	6	1	9
1月27日(月)	1	4	7	12
1月28日(火)	2	2	1	5
1月29日(水)	2	0	0	2
1月30日(木)	2	1	0	3
1月31日(金)	1	0	1	2
2月1日(土)	1	0	2	3
2月3日(月)	0	0	0	0
2月4日(火)	5	0	0	5
2月5日(水)	1	1	0	2
2月6日(木)	0	0	0	0
2月7日(金)	1	0	0	1

## 別紙4

メンター活動についてのアンケート（メンター11名のうち10名から回答を得た。）

1. 今回のメンター活動により下級生の勉強や学生生活に役に立ったと感じますか。

	1（最低）	2	3	4（最高）
男	0	1	2	1
女	0	2	4	0
5年生	0	3	6	1

2. このようなメンター活動は今後も続けたほうがよいと思いますか。

	1（最低）	2	3	4（最高）
男	0	0	2	2
女	1	1	3	1
5年生	1	1	5	3

3. メンター活動をしてよかったと感じたことを書いてください。

- ・少しは役に立てたのかなと思う。
- ・下級生と普段とれないようなコミュニケーションを取れたこと。
- ・教える上で自分の勉強の復習にもなったこと。
- ・自分も理解できない内容を下級生が教えることで勉強になった。
- ・後輩に勉強を教える上で、知識を増やしておこうと前もって学習することができた。
- ・先生では時間の都合で対応できないときでも対応することができること。
- ・後輩に教えることによって、自分の勉強にもなり知識が深まって良かった。
- ・勉強面、生活面での自分らしさの反省点を後輩に伝えることで今後役立ててもらえることができること。
- ・メンターに来る人は、勉強の仕方が分からない人が多かったので、勉強の仕方を教える良い機会になったと思う。

- ・下級生に勉強を教えることで、自分自身の知識不足に改めて気づくことができたので、自分のためにもなった。

#### 4. 今後、メンター活動する上で改善すべきことを書いてください。

- ・教えてほしい科目が事前に分かった方が良いのでホワイトボードなどに事前に書いてもらっておくなど何か方法があったら良いかもしれない。
- ・メンターの得意科目等も知らせておいた方が良い
- ・事前に、教科書等をメンター用に準備しておく、質問されたときに調べやすい。
- ・教える方の先輩もきちんと知識があり、上手に話をできる人を選んだ方が良い。
- ・何が分からないのか前もって分かっているのならば、その教科などを教えてほしい。

(教材の準備のため)

- ・教える場所の固定していることの広告をテスト期間以前より行う
- ・テスト範囲などが事前に分かれば準備ができて良かったと思う。
- ・下級生の参加数を増やすこと。
- ・13:00～始めることが多かったが、メンターに来る人は大体15時くらいから来始めていたので、スタートを遅めたらよいのではないかな。
- ・下級生のテスト範囲を事前に知っておきたかった。

#### 5. メンター活動において教える下級生の数を増やすためのアイデアがあったら教えてください。

- ・今どんな方法で宣伝されているのか分からないが、もっと宣伝をした方が良いのかもしれない。その日、特に受け付ける科目を決めておく(メンターのためにも)+どの教科でもOKの表記もしておく、と良い。また、特に受け付ける科目を決める場合、その担当の先生にも滞在するようにすれば、メンターだけへの依存を脱却できると思う。
- ・授業など、下級生が多く集まる場所でメンター自身が宣伝に行き、下級生にアピールする。
- ・テスト中は4限までテストがある学年もあるので、メンターの活動時間を4時くらいからした方が良いのではないかな。
- ・テスト前以前に週1～2でメンターの活動をし、後輩と接する機会を増やせば来やすいのではないかな。

<⑧>

### 学部連携型PBLシステムの構築（具体的授業プランの検証）

所 属 薬学部

職 名 教授 氏 名 吉富博則

#### （概要）

平成 24 年度に実施したトライアル（人間文化学部心理学科、生物工学部生命栄養学科、薬学部の 3 学部学生対象の問題解決型教育（PBL:Problem Based Learning））を更に大人数の学生（18 名）で実施した。入院患者のサポート計画を立案するだけでなく、標準模擬患者（SP）対象のインタビューを取り入れた。

まず学修の一般目標（GIO）と各学部学生の特徴的な到達目標（SBOs）を設定し、糖尿病（DM）治療中の入院患者をモデルとして PBL のシナリオを策定した。

PBL トライアルは、前期定期試験終了後の 8 月 7, 8 日の 2 日間合計 7 コマの時間で実施した。アイスブレイキング（タコ紹介）の後、Small Group Discussion (SGD)、調査、SP インタビューを実施し、最後に各 S 毎に患者サポートのための計画をまとめて発表した。

#### （成果）

- 1) 今年度トライアルでは SP 対象のインタビューを取り入れたため、従来の患者背景紹介のシナリオだけでなく、3 人の SP 対応の標準化のためのシナリオも必要であった。教員同士で建設的な議論を行うことができ、授業の一般目標や PBL シナリオを策定することができた。
- 2) 学生は、患者サポート計画を立案するだけでなく、自ら患者とのインタビューができたことが高い評価であった。
- 3) 多くの教員にとっても、SP を取り入れた授業体験は初めての経験であり、その有用性が確認できた。
- 4) 学生の意識が患者とのインタビューに偏り、患者サポート計画の立案に関しては、昨年度トライアルの方が充実していた印象であった。これは二日間 7 コマでは授業時間が不足し

ていたと考えられる。

- 5) 参加学生の終了時の感想から、昨年度トライアルと同様に、自分たちの過去の学びとは異なる他学部学生の知識や考え方の違いを驚き、楽しんだようであった。即ち、同じ福山大学で学ぶ他学部学生への理解と敬意が感じられた。

#### (問題と今後の方針)

- 1) 今年度も、看護学部（平成大学）との連携は時間的な問題で実現できなかった。
- 2) 学外の SP（模擬患者）を取り入れる授業は、大人数の学生対象の授業には費用の面で難しい。
- 3) 学部で議論し、今回のような授業（専門の選択科目として）を2年後程度に実現できるのかを検討する。
- 4) 総合大学の特長を活かすために、3学部だけでなく全学部参加に広げる方針で今後検討する。設定が異なる複数のシナリオ策定を検討する必要がある。

<⑨>

### 教育実習生の学習指導技量評価法の開発と応用

所 属 生命工学部海洋生物科学科

職 名 教授 氏 名 河原栄二郎

#### (成果の概要)

教員免許状の取得を目指す学生は、大学における教職課程の履修を通して、教員として期待される様々な資質を育むが、その中で「学習指導技量」は欠くことのできないものの一つである。そこで、本研究では今年度教育実習に参加した本学4年の実習生の実習開始時に担当した授業における学習指導技量評定と実習終了時のそれと比較して、実習生の実習における学習指導技量の向上の様相について、教壇授業の計画と実施に関する28項目について分析した。すなわち、今年度の実習生33名から栄養教諭実習の4名を除いた29名のうち、27名の回答を得て分析した。その際、開始時と終了時の学習指導技量評定値の差を「伸び値」として定義し、この様相から学習指導領域を分類するとともに、開始時の技量水準と終了時のこれまでの総括的な「学習指導評価」の観点から、これらの現れ方を分析した。その結果、学習指導技量評定28項目は、学習指導案作成技量、授業の流れ形成技量、授業展開の技量および指導表現の技量の4つの学習指導領域にそれぞれ4、8、10および6項目に分類された。また、最終的な実習評価に影響する学習指導技量の項目について分析したところ、実習開始時の学習指導技量は必ずしも終了時の評価に直接結びつくものではないこと、最終的な評価に影響するのは「授業展開の技量」であることなどが示唆される。

今後、さらに教員免許の種類毎あるいは学部・学科毎に分析し、最終的な実習評価に影響する学習指導技量の項目が明確となる新たな評価法を確立して教育実習の評価に導入するとともに、その評価結果を活用して教職実践演習の充実ならびに次年度以降の教育実習の事前事後指導の改善を図る予定である。

<⑩>

### スポーツ体育会スタートアップ・ミーティング

所 属 経済学部経済学科

職 名 准教授 氏 名 相原正道

#### (成果の概要)

福山大学ではサッカー部、野球部を筆頭に体育会活動の競技レベルは高い。しかし、スポーツマネジメントレベルはどうであろうか？まだまだ早稲田大学などのスポーツを活用した大学組織に比べ、組織力が弱いと言える。その原因として、横断的なコミュニケーションの欠如が挙げられる。そこで、新たに福山大学で競技者となる新人選手を含めたすべての部活動所属学生に対し、ユニバーシアードなどの世界選手権やオリンピックでの活躍につなげるための研修会を企画したい。競技者として必要となる心構えやマナー、およびビジネスに関する知識、コミュニケーションスキル向上を目的とした競技種目を超えた選手間のネットワークを促進させる。学生の向学心、福山大学ブランドへの愛着の育成はもちろんのこと、今後の学生生活を有意義に過ごさせる指針および協調性をもたせることを目的としたい。大学会館で登壇者の講演およびパネルディスカッション。リーダーズ宣言“今年のチーム目標”を発表し、目標を共有することから実施したい。可能ならば、福山平成大学とも合同で実施。

今後は定期的にキャプテン集会を実施し、大学へ企画提案。Ex.スポーツ学部合同 SNS 発足。  
メディア・放送部（広告研究会）創設。スポーツを通じた地域貢献活動を模索。  
または、初年度はパイロット版として「現代スポーツ論」（担当：相原）の講義時間帯で2コマ実施。その場合は、助成種別を特色ある教育開発補助金に変更  
講師候補：・トップレベル競技者の心構え／川合レオ（玉川学園体育スポーツ科学センター研究員・元ラグビー日本代表・元 NEC グリーンロケッツ）または元広島東洋カープ選手、サンフレッチェ選手、JT サンダース  
・トップレベル競技者のビジネス／半田裕（元 NIKE、adidas、IMG、日本トップリーグ連携機構トップレベルスポーツクラブマネジメント強化プロジェクトメンバー、株式会社 OSS 代表取締役社長）

- ・トップレベル競技者を中心とした福山大学スポーツ／相原正道

今後、予算が増加された場合は、メディアやコンディショニングを追加していく。

トップレベル競技者のメディア／（中国新聞社・運動部長）テレビ局スポーツ局長。

遠征時のコンディショニング／鈴木 岳（R-body project 代表・team aiko 専属トレーナー・JISS

非常勤トレーナー・早稲田大学非常勤講師）

（以下の補足資料 1 参照）

#### 補足資料 1

特色ある教育開発補助金

（課題名）スポーツ体育会スタートアップ・ミーティング

実施目的：学友会における横断的な組織力を強化するため、福山大学へのブランド愛着を育成する講演イベントを実施する。また、本イベントは、東京 2020 オリンピック・パラリンピック招致委員会と大学連携協定を締結した福山大学。連携協定における学内イベント PR 事業の一環として実施する。

まずはどのような可能性があるのかをイメージ共有する講演から始めたい

学生参加事項：

- ・リーダーズ・ミッション（全体育会主将が今期目標を発表）
- ・情報共有および他の部活動との連携強化策を考案させる。

実施計画案 1：短縮講義等で全部活動参加が可能ならば、@大学会館使用。

- ・講演「トップレベル競技における心構え」：ゲスト
- ・リーダーズ・ミッション
- ・「大学スポーツの可能性」 相原正道

実施計画案 2：不可能ならば、後期木曜日 1 限「現代スポーツ論」講義@ 1 2 0 6 教室使用。

- ・講演「トップレベル競技における心構え」：ゲスト
- ・「大学スポーツの可能性」 相原正道

実施計画案 3：東京 2020 オリンピック・パラリンピック招致委員会「みんなのオリンピック」

事業（著名なオリンピック選手が参加）として、先方の予算を+αして実施。

→現在、前期実現に向け交渉中。その場合は、短縮講義として実施を再検討。



<⑪>

産学連携による研究調査事業委託および大学ゼミ対抗スポーツ政策  
コンテストへの参加

所 属 経済学部経済学科

職 名 准教授 氏 名 相原正道

(成果の概要)

笹川スポーツ財団主催大学ゼミ対抗「Sport Policy for Japan 2013」(10月5,6)に日参加し、指導教官の指導の下作成したレジュメとプレゼンテーションを学生自身が実施し審査を受ける。15大学19ゼミが参加し最優秀賞を競い合った。

レジュメとプレゼンテーション資料作成においては、「大学スポーツ関連学部の就職(雇用)先実態アンケート調査」を実施し、同調査結果を下に、今後の課題解決策を検討しプレゼンテーションを実施した。調査内容は、「大学スポーツ関連学部の就職(雇用)先実態アンケート調査」は、日本トップリーグ連携機構 セカンドキャリアプロジェクト調査の委託事業として実施。

結果は、予選落ちであったが、懇親会などを含め同年代の大学生との触れ合いと学業に対するレベルなどを改めて確認できました。

相原の個人的感想：学生の質の違いを実感しておりますので、1年生からの特別ゼミなどを設けるなどして対策ができればと考えます。

予算は、調査票送付回収のための郵便代と、神奈川大学で実施された発表大会における学生代表者4名の旅費として計上。学生の自己負担を軽減できた。

笹川スポーツ財団

Sport Policy for Japan 2013 大会概要

※詳細は冊子参照

<p>日時</p>	<p>2013 年 10 月 5 日（土） 13：00～18：00                  基調講演 川淵三郎（日本サッカー協会最高顧問）                  政策提言発表 1                  10 月 6 日（日） 10：00～17：30                  政策提言発表 2                  政策提言発表 決勝大会                  表彰式・閉会式</p>
<p>会場</p>	<p>神奈川大学 横浜キャンパス                  神奈川県横浜市神奈川区六角橋 3-27-1                  （東急東横線「白楽駅」下車 徒歩約 13 分）</p>
<p>参加 大学</p>	<p>15 大学 34 チーム 約 170 名                  桜美林大学、神奈川大学、札幌大学、産業能率大学、順天堂大学、尚美学園大学、大東文化大学、多摩大学、桐蔭横浜大学、東海大学、東北学院大学、一橋大学、福山大学、立教大学、早稲田大学（五十音順）</p>

審査方法： 審査員による研究要旨審査+口頭発表による評価

◆研究要旨審査（事前審査）

【審査基準】

独創性

既存のものでなく目新しさがあるか。

リアリティ(現実性)／具体性

社会や政策の問題を的確に指摘・評価しているか。（政策分析・評価型）

実社会での実現可能性があるか。（提言型）

妥当性

研究の目的に対して適切なアプローチがされているか。

論理展開に矛盾はないか。

適切な調査に基づいたデータを論拠としているか。

明瞭性

簡潔明瞭にまとまっているか。

◆口頭発表（当日審査）

【審査基準】

- ・プレゼンテーション（説明の分かりやすさ、時間管理）
- ・説明資料（ppt）の分かりやすさ
- ・質疑対応（適切な受け答え）

#### ◆審査員

酒井博司（三菱総合研究所 主席研究員 政策・経済研究センター長）  
 坂田信久（元 日本テレビ プロデューサー）  
 佐野毅彦（慶応大学大学院 健康マネジメント研究科准教授）  
 鈴木和幸（日本スポーツ法学会 監事 元東京都教育庁主任社会教育 主事）  
 渡邊一利（笹川スポーツ財団 専務理事）  
 渋谷茂樹（笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所 主任研究員）  
 工藤保子（笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所 副主任研究員）  
 吉田智彦（笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所 研究員）  
 藤原直幸（笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所 研究員）

#### 担当教員所見：

・学生の感想から考察するに、学生の勉学に対する意識が主体的になっていることが伺える。皆、準備不足を述べているが、初参加を考えれば否めないことだろう。今回の参加を機に、他大学の学習レベルの高さを痛感し、個人では卒論に活かし、後輩には体験を伝達してくれるのが財産となる。

・学習レベルとしては、他大学（および担当教員前任校（偏差値 55 で同大会準優勝））と比べ、IT リテラシー能力不足、プレゼンテーション機会の少なさ、先輩ゼミ生から情報共有がないことが弱点といえる。福山大学は地理的に井の中の蛙状態にあるので、他大学交流が少ないのは致し方ない。しかし、企業（社会）に出たら嫌が上にも競争社会に投入される。今回の大会参加を通じて、外部の同年代学生の能力を知り、主体性をもち勉学に励むことが当然と理解できた。他大学の例を申し上げますと、大学院生および先輩ゼミ生から指導を受け、学生が実践を司る。大会ごとに研究発表レベルが向上するはずだ。

私は地理的ハンデがあろうと、この大会で学生を勝たせたいと本気で考えております。スポーツ競技だけでなく、スポーツ・ゼミにおいても全国大会で表彰されることは、本学のスポーツマネジメント教育の発展のためにも効果が高いと思われまます。

勝つために、1. 自己否定感→自己肯定感への意識改革、2. IT リテラシー強化（PPT デザイン・演出力強化、PPT で作成した講義課題提出）、3. 教養ゼミ（1, 2年次）の有効活用（3年次からでは遅いので、選抜クラスを導入）、4. 中国地方で予選大会を開催、を提案したい。

#### 福山大学学生の感想抜粋：

事前準備：他大学は現地担当者へインタビューを実施。

当日：プレゼンテーションにおけるわかりやすさ、質疑応答における対応に差がある。  
 練習量でも差がある。

事後考察：友人ができた。次回は勝ちたい。もう一度参加したい！

下記学生 全文章掲出。

福山大学 経済学部 T君

1. 事前準備（書面作成、資料集め、アンケート調査、集計など、気づいたことや学びを書く）

最初は何をどうしたらいいのかわからなくて言われていたことをただこなすだけでしたが、アンケート調査をして集計していくときには大学によって授業内容であったり、就職・進学などいろいろな違いがあることに気づきました。

2. 当日（プレゼンテーション、他大学とのコミュニケーションな、気づいたことや学びを書く）

自分は福山大学代表幹事として当日会場の仕事等をしていましたが、その日までの会議や話し合いも遠かったため参加できず何をしたらいいのかわからずにいたら、他大学の方が話しかけてきてくれて、それをきっかけにだんだん積極的に話せるようになって他大学と仲良くなることができました。

プレゼンテーションについては他大学を見ていると、とても分かりやすく楽しかったし

自分たちの発表の時も最初話すまでは緊張していましたが、話していくにつれ緊張もほぐれとても楽しかったです。

3. 事後考察（学習効果があったこと、今後の改善点、今後実施の有無、今後の活動（ex. 卒論大会に参加するとか、就職活動へ意欲とか）など気づいたことや学びを書く）

今後の改善点でいえば、遠くに会場があり会議や話し合いにも参加できていなかったもので、校内のことや会場についてから何をどうしたらいいのかが全く分からない状態で行って慌てた感じになったので、福山大学代表幹事になった方は他大学と連絡が取れるようになるのでしっかり連絡を取り合っただけで分からないことがなるべく無いようにしていけたらなと思いました。

福山大学 経済学部 N君

1. 事前準備（書面作成、資料集め、アンケート調査、集計など、気づいたことや学びを書く）

事前準備などは他の大学と比べるとすごく時間がかかったと思います。誰かがやらなければ進まないし、適当にやっていたらうまく分析ができなと思いました！他の大学ではわざわざ現地に赴いて話を聞いたり、アンケートを実施したりするなどものすごく具体的にかつ説得力があった！

2. 当日（プレゼンテーション、他大学とのコミュニケーションな、気づいたことや学びを書く）

プレゼンの内容も自分たちとは異なり言いたいこと、やりたいこと、これをすればいいなどすごく聞いていて面白いことなどがあった！プレゼンの説明の仕方はジェスチャーや読む速さなど沢山の工夫がみられました！練習もたくさん行ったんだなとすごく実感することができました。

3. 事後考察（学習効果があったこと、今後の改善点、今後実施の有無、今後の活動（ex. 卒論大会に参加するとか、就職活動へ意欲とか）など気づいたことや学びを書く）  
学習効果はすごくあったと思う！自分たちが研究したこともそうですが、他大学の研究成果を聞いたことはすごくためになるとおもう。今後はやはり発表の土台を明確にして、早めに作業に取り組み電話などで話を聞くのも大事だと感じました！実際に卒論でこの大会でのことを使えるのかはわかりませんが、プレゼンの仕方、こう話をもって行けば納得してもらえるなどたくさん使えることがあったと思います。

福山大学 経済学部 F君

1. まずデータから元に様々な観点から問題点を探し出し、主観的客観的に見てみてテーマを探る。プレゼンでパワーポイントを作る際、文字ばかりでなくグラフプラス  $\alpha$  文字で説明する構成を組む。
2. 発表する前に再度流れを確認する。自分が発表するところだけを覚えるのではなく、チームの他の人の発表も把握しておく。質疑応答は答えられるものは答え、答えられないものは「準備不足でした。今後の研究課題とさせていただきます」など上手いこと逃れる。
3. この経験を元に卒業論文の発表に活かしていきたいです。他の大学はこんな感じでやってるんだなどと知れて、次はこうしていこうというイメージができました。リベンジといった形で臨みたいと思います。

<⑫>

## ロボコミュニケーション社会創造プロジェクト

所 属 人間文化学部人間文化学科  
職 名 教授 氏 名 青木美保

### (成果の概要)

#### 1、研究の概要

レストランに、言葉を発するロボットを設置し、それが人のストレス緩和にどのような役割を果たすかを研究目的とした。そのために、人の動きに合わせたロボットの動作、ロボットの動作による人の動きを自動記録するため、測距センサーを用いて顧客の行動の判別と記録をするシステムを構築した。

このシステムによって得られたデータを、行動コーディングシステムの行動連鎖分析により、ロボットの言語・非言語の両側面が人間にどのような影響を与えたのかを検討した。その結果、方言や動作の有効性の裏付けが得られた。

#### 2、成果の発表

##### ①学会口頭発表

###### A 沖俊任「レストランにおけるロボコミュニケーション」

日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス部門 ロボティクス・メカトロニクス講演会 2013 (Robomec 2013) 講演論文集, p. 2P1-P21 (2013)

###### B 岩本展幸「ロボコミュニケーションのための行動分析システムの検討」

第14回 公益社団法人 計測自動制御学会 システムインテグレーション部門 講演会 (SI2013), pp.2622-2625 (2013)

##### ②論文発表(予定)

青野篤子・辻田詞保里共著「『ロボコミュニケーション』における方言の動作と役割」、『福山大学人間文化学部紀要 15号・2014』に発表予定。

##### ③卒業論文

###### A 岩本展幸(電子ロボット工学科生 2013年3月卒業)の卒業論文

「RTミドルウェアを用いたロボコミュニケーションのためのロボット」

###### B 辻田詞保里(心理学科生 2013年3月卒業)の卒業論文

「ロボットと人間の行動連鎖分析—言語・非言語の観点から—」

##### ④研究報告書

『福山大学教育振興助成金2012・2013 採択事業 2013報告 社会連携事業 ロボコミュニケーション創造プロジェクト』(2013年3月15日付発行)

A4 25頁

<⑬>

「映画論」を福山の町中で—福山近郊映画館と協働した上映会の企画運営

所 属 人間文化学部メディア情報文化学科

職 名 助教 氏 名 阿部 純

(成果の概要)

本活動は、(1)5月に福山駅前シネマモードにて東日本大震災後の東北地域の人びとを追った記録映画『なみのおと』の上映と、監督をお招きしてのティーチインの開催、(2)後期開講の「映画論」で企画したミニ映画会をプロジェクトMで行うことの2軸で進めた。

- (1) 福山市周辺の100名弱の方々にご参加いただき、『なみのおと』の上映会と濱口竜介監督を交えてのティーチインを学生主体で行った。ティーチインでは、司会の学生から撮影時のカメラの配置やインタビューの仕方といったテクニカルな部分と、被災地を周りながら考えめぐらしていたことについての質問が行われた。参加者アンケートの結果も概ね良好であり、映画上映会として良い成果をあげることができた。映画会準備においても学科全体で震災について振り返るワークショップを行い、マスコミ各社から取材を受けるなど、学生が徐々に主体的に会を作り上げていくさまを見ることができた。
- (2) 後期開講「映画論」の最終成果発表会として、授業内で取り上げたキーワードから映画作品を選び、学生各自で分析したものの発表会を行った。ゲストとして、福山駅前シネマモードの岩本支配人に来ていただき、個々の発表についてコメントいただく形で進め、プロジェクトMの学生も巻き込みながらの発表会となった。教室とは異なる環境で、学外の方を交えての発表は学生にとって刺激的なことだったようで、発表内容とその後のディスカッションともによく練り上げられており、ゲストの方からも非常に高い評価を得ることができた。



映画  
「なみのおと」上映会  
+ 濱口竜介監督ティーチイン  
5/12 (日) 13:00~

●日程  
12:30 開場  
13:00 「なみのおと」上映開始  
上映後に濱口監督と質疑応答  
16:30 終了予定

●会場  
福山駅前シネマモード  
(旧福山駅前ピカデリー劇場)

●入場料金  
・前売券 一般 1000 円  
福山大学関係者 700 円  
・当日券 一般 1300 円  
福山大学関係者 1000 円

●チケット販売所  
・福山駅前シネマモード (4/20~)  
・福山大学 19 号館 4F  
阿部純助教 研究室

●企画・構成  
福山大学人間文化学部  
メディア情報文化学科  
<http://www.fukuyama-media.jp/>

福山駅前シネマモード  
福山駅より徒歩 3 分  
広島県福山市伏見町 4-33  
☎090-4571-3686 (シネマモード 岩本)  
HP:<http://fuec.jp/>




### 上映会を企画した福山大学生より

この映画イベントは、被災者の思いを記録していくことや土地の伝承について考えることを目的としています。震災以降にテレビ報道やSNSで語られることが、被災者の気持ちを共有しない復興論や原発問題に多く割られていたのではないかと疑問に感じたことがこの会を企画したきっかけでした。


映画『なみのおと』は、東日本大震災の被災者にインタビューした映画であり、被災者同士の対話が淡々と映されます。被災者同士だから言えること、分かることがあると思います。また、私たちが見て気づくこと、考えさせられることがあると思います。私たちがこの映画を見て、思うことは一体何であるのか一緒に考えてみませんか。

### 震災を「聴く」こと「撮る」こと 「記録する」ことを考える

### 監督紹介



**濱口竜介**  
1978 年神奈川県生まれ。  
東京大学文学部大学卒。卒業後、商業映画、TV番組制作の現場で助監督として活躍する。2006年、東京藝術大学大学院映像研究科映画専攻監督領域に入学。修了制作として制作された長編映画『PASSION』(2008)は、2008 度のサン・セバスチャン国際映画祭と東京フィルメックスのコンペ部門に入選。チェコのカルロヴィワリ国際映画祭にも正式招待され、高い評価を得る。公開待機作『THE DEPTHS』『親密さ』など。  
今回の上映会で初来福が決定。



**酒井耕**  
1979 年長野県生まれ。  
東京農業大学卒。在学中に、自筆脚本による短編から中編作品を監督する。卒業後、社会人として働いた後、2005年に東京藝術大学大学院映像研究科監督領域に入学。黒沢清、北野武に師事し、「愛の星」、田辺聖子原作短編選集より「ホーム・スイート・ホーム」、修了制作作品「CREEP」などを監督。課程を修了する。現在は、フリーとして活動中。

### 映画「なみのおと」作品介绍

津波の被害を受けた三陸沿岸部に暮らす人々の「対話」を撮り続けたドキュメンタリー映像作品。姉妹、夫婦、消防団仲間など親しいもの同士が、震災について見つめ合い語り合う「口承記録」の形がとられている。互いに向き合い対話する事は震災そのものに向き合うことでもあるのかもしれない。被災地の悲惨な映像ではなく、対話から生成される人々の「感情」を映像に残すことで、後世に震災の記憶を伝えようとする試み。若い監督 2 人も互いに対話を重ねながら撮影を進めた。

『PASSION』『The Depths』などで注目される濱口竜介が、『ホームスイートホーム』『CREEP』などを手掛けた酒井耕と共同で監督。142 分の最新版での上映となる。

「この「語り」は、実際は過去や未来のためという以上に、今まさに起こっている「復興」の活動そのものではないだろうか、という気がしています。それは、瓦礫をただの瓦礫にしないための、個人と共同体の歴史を取り返す作業であるからなのです。」(山形国際ドキュメンタリー映画祭・東日本大震災復興支援上映プロジェクト「Cinema with Us ともにある」カタログより 作者のことば)

2011 年 / ドキュメンタリー / 日本語 / カラー / 142 分  
監督：濱口竜介・酒井耕  
撮影：北川喜雄  
監音：黄永昌  
製作者：堀越謙三・藤嶋正樹  
製作：東京藝術大学大学院映像研究科  
製作助成：芳泉文化財団 / German Japanese Association  
制作協力：せんだいメディアテーク「3 がつ 11 にちをわすれないためにセンター」  
配給：東京藝術大学大学院映像研究科  
配給協力：サイレントヴォイス



< ⑭ >

## 地元住民と連携した学生による本郷川の環境調査と修復活動

所 属 生命工学部生物工学科

職 名 教授 氏 名 山本覚

### (成果の概要)

福山大学キャンパス所在地の周辺住民は7つの自治会を組織し、さらにこれら自治会は今津学区自治会連合会を組織して、地域の中央を流れる本郷川の環境保全に取り組んでいる。環境保全に関する教育をカリキュラムに組み入れている生命工学部生物工学科及び海洋生物科学科では、福山大学教育システムの目標 Step 3「地域社会への参加」と各学科の教育目標達成を目指し、本課題研究を計画し、以下の取組みを実施した。

#### (1) 本郷川の一斉清掃活動

生物工学科、海洋生物科学科の学生・教員（148名）が7月7日（日）午前8時に長波会館前に集合して、午前中の河川清掃活動を行った。この活動には多数の地域住民も参加しており、学生と地域住民の交流を行うことができた。

#### (2) 本郷川の水質調査

海洋生物科学科の環境修復研究室に所属する4年次生が本郷川の水質環境を卒業研究のテーマに取り上げ、本郷川の水質変化について卒業論文にまとめることができた。

#### (3) ゲンジホタルの養殖技術の確立

福山大学キャンパス近くを流れる農業用水路に自然生息するゲンジボタルを材料に、産卵⇒孵化⇒幼虫⇒蛹⇒成虫に至るすべての過程を研究室内で行う技術を確立できた。平成25年5月下旬～6月上旬にかけ、

研究室内で数百匹のゲンジボタルを羽化させることに成功した。

#### (4) 「本郷川美化サミット」及び「ホタルの夕べ」への参加

山本 覚教授が「本郷川美化サミット」に出席し、平成24年度の本学部の取り組みについて報告した。また、続いて開催される「ホタルの夕べ」にも出席し、地域住民と親交を深

めることができた。

#### (5) 秋祭りへの参加

今津学区では例年秋祭りが盛大に開催され、各自治会の神輿が町内を巡行するのが恒例となっている。しかし、住民の高齢化等により神輿の担ぎ手が少なくなり、その実施に困難をきたしている。そこで、生命工学部の学生 30 名を各自治会に助っ人として参加した。

#### (6) 福山老人大学における講義

平成 26 年 1 月 21 日に福山老人大学において、山本覚教授が「環境保全について考える」というテーマで講義を行った。この講義では、本取り組みについても紹介した。

#### (7) その他

福山市においては農地の維持・管理に苦慮する農家が多く、これまでも学生の協力要請を度々受けてきたが、種々の事情によりそれらの要請に応えることができなかった。しかし、本取り組みにおいて学生の地域社会の活動への参加意識を観察した結果、生命工学部学生の多くが社会参加及び奉仕精神を十分に持つことを確信することができた。生物工学科では平成 26 年度より醗酵科学プロジェクトを始動させる予定である。この度、福山市内のブドウ栽培農家よりブドウ園の維持に協力要請をいただいた。本研究で得られた本学部学生が社会参加及び奉仕精神をもつという確信を基に、平成 26 年度よりこの要請に応えることになった。

#### まとめ

本研究では、本郷川の環境保全と修復活動という大きなテーマに取り組んだ。環境保全及び修復には目に見える大きな成果を挙げることはできなかったが、地域社会の中に本学の存在を顕示し、学生が地域の皆さんとの交流については、目標を超える成果をあげることができたと判断している。また、本研究において、学生たちの意識を再認識することができ、生物工学科の教育・研究の新しい展開に大きな貢献を果たしたと考えている。

## <⑮>学生の社会連携活動参加を促進する「エンカレッジポイント」

所 属 生命工学部生命栄養科学科

職 名 准教授 氏 名 平松智子

### (成果の概要)

ボランティアや各種行事へ自主的な参加を目的に各種行事にポイントを付与し、年度末にポイント上位取得者を賞するポイント制を3年間実施した。2011・2012年度の試行期間を経て、昨年の要望を加味し、学生が主体的に運営を行った。

成果：アンケート回収率は61%であった。生命栄養科学科のエンカレッジポイントは68%が理解していたが、40%は自主的に参加していたが自己の取得ポイント数を把握していた者は17%と低値であった。感想の多い順として、良い経験になった・知識が広がった・他学年、教員との交流ができた・マナーが身についたであった。また、来年度ポイント制継続希望割合は50%であった。今年度実施して、学生が主体的に実施できるようになったことは成果の一つである。しかしながらポイントのみならず、学生に社会的活動参加の意義を理解させ、積極性を身につけるなどが先決であると思われ、次のような検討の必要性を痛感した。ボランティア等に興味はあるが、一步を踏み出せないという学生は多く、まず参加するという奨励・支援の取り組みが必要である。地元自治体、地域の社会福祉協議会、国際協力団体、NPO、スポーツ団体、青少年団体等関係団体と連携協力し、講座やサービスラーニング科目、NPOに関する科目等の開設、単位化も一案であると思われる。また学生に対するサポート体制の充実、学生が活動を行いやすい環境の整備（ギャップイヤー制度）、ボランティア活動に関する啓発、就職の際に評価するなど活動実績をより一層重視することを明確にするなど視野を広げた形での取り組みも重要と考える。3年間実施し、地道ではあるが生命栄養科学科としての雰囲気作りはできつつあるが、身近な課題も見えてきた。次年度ポイント制は継続するが、縦割り班における行事等の実施により各学年間の交流が出来る創意工夫等が必要と思われる。

参考：文部科学省「奉仕活動・体験活動の推進方策等に関する中間報告」